

## 論文の内容の要旨

論文題目 白鳥敏夫と日本外交、1930－1941年  
(Shiratori Toshio and Japanese Foreign Policy, 1930－1941)  
氏名 モロジャコフ・ワシーリー  
(Vassili E. MOLODIAKOV)

1931年9月の満州事変勃発から1941年12月の太平洋戦争勃発に至るまでの十年間の時期は、日本近代政治・外交・社会史において「危機の時代」等とよく評価され、歴史研究から見れば非常に興味深い時期である。日本でも海外でもこの時代の研究著書は枚挙に遑がないが、まだ研究されていないテーマと問題も少なくないであろう。本論文の研究課題になった昭和戦前期の代表的な外交官と政治評論家白鳥敏夫(1887－1949年)の行動と政治・外交思想は、日本外交、政治、思想、国際関係の歴史において重要な役割を果たしたが、その一つであろう。それ故、筆者は、本論文の研究テーマとして白鳥の行動と政治思想の検討を選んだのである。

白鳥は、外務省情報部長(1930－1933年)、駐スウェーデン・ノルウェー・フィンランド・デンマーク公使(1933－1937年)、駐伊大使(1938－1939年)、外務省顧問(1940－1941年)として、日本でも海外でもさまざまな出来事と直接的な関係を持った。それは、満州事変、国際連盟脱退、皇道外交論と大陸政策の立案、日中戦争(いわゆる「支那事変」)、日独(のち日独伊)防共協定の締結と同協定強化の努力、日独伊三国同盟論の立案等である。白鳥の行動と思想の詳細な再検討は、その出来事を中心とする1930年代の日本史、世界史の理解のために必要であると思われる。また、昭和戦前期の日本外交官の間に白鳥は、「全体主義時代の外交官」というタイプを代表していたと結論できる。

本論文は、白鳥の伝記、評伝ではないが、白鳥の行動と思想の全体像を構築するためには、彼の一生における行動と政治思想を世界史のできるかぎり幅広い文脈のなかで捉えた初めての研究になると言える。こうした試みが成功するためには、筆者は、日本の資料に限らず、アメリカ、イギリス、ドイツ、イタリア、ロシア（ソ連）、スウェーデン等の多数の資料と研究論文を検討している。

本論文は、具体的研究課題として、以下の主な七点に留意しつつ、この時期の政治・外交史をできるかぎり統一的に理解することを目的としている。

その第一点は、1931年9月の満州事変勃発前後、白鳥情報部長を中心とする外務省革新派、軍部と革新官僚との協力の再検討である。その第二点は、満州事変勃発以後、外務省情報部とマス・メディアとの関係、また白鳥情報部長の個人的影響力の分析である。その第三点は、1936年の日独防共協定の準備と締結における白鳥の役割の研究である。その第四点は、1937年7月の日中戦争勃発以後の時期における、白鳥の「皇道外交」論と大陸政策論の再検討である。その第五点は、1938－1939年の日独伊防共協定強化の交渉における、駐伊大使として白鳥の役割の研究である。その第六点は、白鳥の1940年の日独伊三国同盟に対する「明日の世界」と「戦いの時代」論の再検討である。特に、筆者は、白鳥の政治思想の主な特徴としての地政学的アプローチを研究したい。その第七点は、1930年代中白鳥のソ連・ロシア観とその興味深い進化の詳細な研究である。

本論文においては、1930年から1941年までの時期を中心としつつ、白鳥の一生を検討すべく、以下のように構成されている。第一章「外務省情報部長時代、1930－1933年」は、白鳥の満州事変勃発前後の行動、国際状況観、日本と外国のマス・メディアとの関係、外務省革新派の活動、外務省内の派閥間闘争等（研究課題の第一、二、七点）の分析である。また、この第一章は情報部長就任以前の時期の検討を含める。第二章「駐スウェーデン公使時代、1933－1936年<sup>1</sup>」は、日独防共協定の準備過程における白鳥の役割と彼の強硬な反ソ・反共観（研究課題の第三、七点）の研究である。第三章「帰国から駐伊大使就任まで、1937－1938年」は、日中戦争勃発以後の時期における、皇道外交論と大陸政策論を中心とする白鳥の政治思想（研究課題の第四点）の再検討である。第四章「駐伊大使・外務省顧問時代、1938－1941年」は、本論文に初

---

<sup>1</sup> 白鳥は、ヨーロッパから1936年12月末に帰国した。

めて紹介される未公開資料<sup>2</sup>に基づいて、白鳥と日独伊防共協定強化の交渉、日独伊三国同盟の準備等との関係（研究課題の第五点）の検討である。第五章「三国同盟からユーラシア四国同盟論へ——地政学者としての白鳥、1939—1941年」は、白鳥の「明日の世界」という日独伊三国同盟観、「ユーラシア（大陸）・ブロック」という日独伊ソ四国同盟論と彼の地政学論の研究である。結章は研究効果と本論文の結論を含めている。

本論文では以下のような結論が導かれる。

1) 外務省情報部長である白鳥は、これ以前外務官僚の大部分と同じように「幣原外交」を支持したが、満州事変勃発直後、国内雰囲気の変動、特に軍部、革新官僚、右翼政界から影響を受けて、「180度の転回」を感じた結果、アジアにおける日本の拡張政策の擁護者になった。

2) 外務省情報部長として白鳥は、日本新聞記者に対して外務省の政策に協力をするようアピールした。彼は新聞・通信社を通じて日本と海外の世論を統制することはできなかったが、それらに影響をおよぼす希望はあったであろう。すなわち白鳥は、日本の政策を明らかに説明し、日本のケースを守ろうとしたのである。外国人記者は、白鳥を「スポークスマン」と呼び、彼個人の見解とコメントを日本外務省、日本政府の立場として発表したことも少なくなかった。

3) 日独防共協定締結の準備と交渉における白鳥の具体的関与と役割は、資料が乏しいので、十分には明かではない。だが彼は、舞台裏の主役としてその交渉に参加し、駐独大島浩陸軍武官を援助したことは確かである。政治的にも、思想的にも日独防共協定は、白鳥の国際政治観、ソ連・共産主義観に合致したのである。

4) 日中戦争勃発以後、白鳥は、在野の評論家として有力な雑誌で政治・外交評論を展開して、急速に人気を博するようになった。白鳥の「皇道外交論」と「大陸政策論」の内容は、アジアにおける日本の侵略拡張の路線であると評価することができるが、彼は日本伸張の経済・政治的側面より道義的・社会的・文明的側面を強調していた。政治思想家として白鳥は、アジア以外の諸国との提携関係の重要性を理解していたので、ドイツ・イタリアの全体主義的ブロックとの協力の擁護者になった。

5) 1938年中「支那事変」が長期化したため、陸軍と「革新的」政界は、独伊ブロックとの提携強化の方向に進んでいった。1938年の夏に、外務省革新派、陸軍と民間右翼は、外交革新と「支那事変」解決のため外務次官に白鳥を擁立しようと試みたが、宇垣外相の親英方針や海軍

---

<sup>2</sup> それは、東京裁判期の白鳥発米人弁護士コードル宛未公開書簡のフル・テキストである。

の決定的反対からその努力は失敗に終わった。同年駐伊大使に就任した白鳥は、駐独大島大使とともに日独伊防同盟構想を完全に受け容れ、同盟締結のために活動していたが、兩大使の努力は失敗に終わった。第二次近衛内閣の松岡外相の指導下に外務省顧問に就職した白鳥は、松岡外相との非常に離れた人間関係のおかげで、1940年の日独伊三国同盟、1941年春の松岡外相の欧州訪問、日ソ中立条約の準備等の活動にほとんど参加しなかった。恐らく白鳥は、松岡の次に外相になる可能性が高かったようであるが、1941年4月、不治と思われるほどの重病のために政治舞台を去ったことになる。

6) しかしながら、1939-1941年に白鳥は、日中戦争の時と同じように権威がある政治評論家として政界・輿論に影響を及ぼしたことになる。彼は、新聞・雑誌・講演会におけるコメントを遠慮し、欧州戦争、日独伊三国同盟の主要なコメンテーターの一人になった。白鳥は、日独伊三国同盟を「世界新秩序の条約」、「明日の世界の条約」と評価し、その精神的意味と意義を強調していた。また、白鳥が日本で初めて日独伊ソ四国の「ユーラシア・ブロック」(「大陸ブロック」)の必然性を論じている人物であることは確かである。

7) 白鳥のロシア・ソ連観は、満州事変の時に非常に反ソ・反共になった。1935年11月、有田(当時駐ベルギー大使)宛白鳥の未公刊書簡は彼の外交構想、特に対ソ政策構想を明快に論じている。白鳥は、ツァーのロシアと同じようにソビエト・ロシアを日本の「ナンバー・ワン」の敵と見なし、強硬対ソ政策をできるかぎり宣伝していた。日中戦争勃発以後白鳥は、強硬対ソ政策を支持していたが、1939年の独ソ不可侵条約締結の影響でも一度「180度の転回」をして、日ソ接近、のち日独伊ソ「ユーラシア・ブロック」の理論家になったのである。